



人工の星  
北 社夫  
潮出版社  
(4/25刊・¥880)

二十年前後、作品によっては三十年近く前に発表された、著者のSF風中短篇、十三作を収めている。あえて「風」と書いたのは、日本にSFの根付く以前の作品が、多いからである。しかし、これらには、今日、日本SFの持つ雰囲気がある。

SFそのものとして見てしまうと、「朝の光」「陸魚」「うつろの中」など、アイデア・ストーリーは、そのアイデアと共に鮮度を失っている。もともと、アイデアを最後のオチに凝集させようとするために、物語の組み立てが、きわめて単純であるからだ。ただ「月世界征服」「推奨株」の駄ジャレや、「贅沢」「買物」「意地悪爺さん」等の皮肉さは、現在に通じるところもあって、楽しめるだろう。

本書の標題作「人工の星」は、近未来の倦怠を漂わせる中篇である。人工の星——軌道ステーションの浮かぶ未来——希望に溢れる社会のはずなのに、主人公の会おう人々には、どこか虚ろさが果くっている。「空地」の言語感覚にもいえることだが、SFプロパーの持つ方向性と、著者の文学的な視点の混在した、それだからこそ、新しきすら感じさせる作品となっている。